

国木田独歩の佐伯での生活

(十三)

山内武麒麟

(賛助会員・佐伯市城下東町)

四月の記には

二、三、四日は過ぎ去りたり。

吾今熊本市細工町ノ一旅宿の楼上に此筆を採る也

と、ある。熊本市に来て、一旅宿の二階の室でこの記を書いているのである。

そして

吾が心中無限の悲愁の在りて存する也。

帰省中に聞き得たる事実、観察したる事実は吾をして実に言ふ可からざる悲を心底に感ぜしめぬ。

と、帰省中に自分の愛する郷土の村々で見聞したことに對する感想を述べてある。

二日には又麻郷村に行きその夜は東家に一泊している

三日の夜柳井港から汽船に乗り

四日の朝門司に着き汽車で午後五時過ぎ熊本に着いて

いる。

五日の記

観たる事物多く、感じたる節少なからずと雖も、兎角筆執る能はずして放抛せられぬ。いざ筆にまかして記し置かん。

と、初めに書いて、二日からのことを記してある。

先ず昨四日のこと。

昨日熊本に着くとすぐ水谷真熊君に一報しておいた。

昨夜は外出して以前水谷君から熊本市中の日抜き通りと聞いていた唐人町を見物した。或町の或店で二十万分の一の地図の熊本近傍の分を一枚買い求めて、水谷君の在所の杉上上村を探がしてみたがわからなかった。

今日は水谷君が訪ねて来るだろうと待ったが来ない。

停車場なら出遇うかも知れないと二度停車場まで行つてみたがとうとう遇うことは出来なかつた。午後は水前寺へ行き、熊本の郊外の広々として美しいのに驚いた。阿蘇の峯の方に見える白雲は火山の噴煙ではあるまいか。空は遠く山は長く心がのびのびとした。

水前寺は水が清くて春の頃が一番よいのではないかと思われた。

夕暮頃一人で人力車を飛ばして高木正雄君を新屋敷町の家に訪ねたが留守であつた。仕方なく置手紙をして帰つた。

次に二日のことを記してある。

二日は早朝柳井の家を出て麻郷村の吉見家を訪ね、午後はあや嬢（四女）と春嬢（三女）とを連れて平生町に行き写真の撮つた。

次にその感想を記してある。

少女の愛らしき、無邪気なる、実に吾をして此少女等が何時までも少女にして吾の何時までも青年なるを希ふの情に堪へざらしむ。哀哉、老や、楽しき罪なき時は過ぎねばならぬか吾をして只回想に泣かしむるか

と、現在は短かく、回想の恨みの永いことよ。待つものは中々来ないようですぐ来る。そして来たものは永遠に去つて帰つて来ない。人生とは悲哀なものである。

もし人間の前途に永久の希望が無ければ、この人生は呪うべきである。

吾をして只だ愛に生かしめよ。愛は過去なり現在なり未来なり。

と、愛に生きることを希っている。

この二日の夜は東家に一泊した。

夕方、羽隅さんに招かれて行つた。御馳走があつた。幾馬と語り合つた。この人は去年の正月に一人の男の子が生れた。彼の希望は今全くこの男の子にかゝっている。彼はこの男の子の前途を考えて自分に頼むつもりらしい。彼もたのむと云つた。

この男の子は今幾馬さんの一生の望みであり命である。子の無い大嶋さんを思い、そしてこの幾馬さんと会つたことは自分に色々感慨が起つてくる。

幾馬さんの父は自殺し、兄は斬られた。そして幾馬さんは瓦焼きに失敗し貧しく暮しているが、今は希望が生じた。大嶋さんは不幸な一生を過ぎ今は老いて子がなく

しかも近頃は罪惡にすら余儀なく陥って苦しんでいる。すべてこれらの人々の運命を味うべきである。同情に堪えないものがある。

東家に泊った。この晩は久次さんも在宅で色々と面白い話をした。

この久次という人は東家の嗣子で小学校教員、後に県視学、柳井小学校校長を歴任した。吉見家の三女がその夫人であった。

平原の吉も来て自分に入野虎之進の悲惨な運命について話ってくれた。このことは後で詳しく書くことにする。夜が更けて話も下火になったので、久次さんと外に出た。星がきらきらかゞやき、山は音なく静かで、寒さも強い。吉見家の前まで行く。吉見のおばさんはまだ起きていた。それで家の上って話した。吉見のおばとちゑ嬢と自分と久次君と火鉢を囲んで話した。

話は面白くて夜更けるのも忘れてとうとう十二時まで話した。

おばは横道一家の悲惨な運命について話してくれた。そのことはまた後に書く。

翌日、朝吉見家に行つてまた話す。それから東久次君

と同道して麻郷村を出て平生の小川さんを訪問し御馳走になる。今蔵氏と快談した。

久次君と一しよに平生から出る道で、横道家零落の跡を見た。そのことは横道氏のことを書くとき詳しく書く。小川家からいとまごいして久次君を連れて柳井に帰宅した。

この日の日が暮れて、母と市山正さん、たけ嬢達に見送られて岸の下港から汽船に乗り門司に向つて出発した。

夜三十六灘を航通して夜明け方門司に着いた。古河文という回漕店で朝食し、一番列車に乗って箱崎に向けて出発した。箱崎に下車して箱崎八幡宮を見物した。箱崎から人力車で博多に出て博多を見物してまた汽車に乗つて二日市に降り大宰府天満宮に詣でた。二日市からまっすぐに熊本に着いた。午後の五時半であった。

と、二日から四日までのことを書いてある。

次に宿屋の窓から阿蘇の方を遠望したのであろう。

阿蘇の煙、始めは山頂一朵の雲と疑はしめ、後漸く阿蘇の噴煙なるを知る。

阿蘇山々々々 美なるかな阿蘇山。

と、記してある。

六日の記

午前高木正雄君が訪ねて来た。昨夜同君を訪ねたが不在であった。

色々と数時間話した。それから一緒に花岡山に登った。そして熊本市を見下ろした。

この花岡山という山は熊本城の西南にある。明治九年この山上で、海老名弾正、徳富蘇峰、浮田和民ら三十五人が奉教趣意書を決議した。所謂、熊本バンド発祥の地である。

夜は高木君を訪ねた。話は人生を靈魂のことまで及んだ。自分はこの時、自分の生命の現実にあることをつらつら感じた。

その感じたことは、

嗚呼怠けたる生命よ、自棄なる吾よ、爾の生命は如何に過ぎつゝあるかを反省し来れ。義務の念薄し。故に克己の念薄し、故に勉勵の實少し。

自分の現実の生き方を強く反省し
シンセリティでなければならぬ。どうか自分をシンセリティに帰えらせてくれ。生というものは真自面なものではないか。

人間は何のために生れ、生きながらえて日を送っているのか。この一人の自己にどんな意味があるのか。と、問い直し、

只だ吾に情あり、月を美と感じ、人を愛らしく感じ神を尊く感ず。只だ此心あり。此心是れ人類の心、是れ人間の意味ならずや。

と、人の心を自分も持っていると思ひ直し、この自分の生命は確かに実際にある。幻影を追ってよいのか、自暴自棄になってよいのか。よいことはない。と、自分を戒めている。

十四日の記には

六日筆を擱てより一週間忽ち経過し吾今坐して再び坂本氏の楼上に在り待ちに待ちたる冬期休業の帰省並びに旅行は忽ち来りて忽ちに過ぎぬ。

と、記して、次に七日から十三日に佐伯に帰省するまでの記を書いてある。

七日はとうとう水谷君を在所の杉上村に訪う決心をして人力車を雇い川尻まで行ってくれと細工町の宿屋を出発した。

車が走ってまだ数町も行かないところで水谷君が来るのと出遇った。

それから紀の国屋に行つて昼食をすまし、三人一しょに杉上村へ出発した。紀の国屋は水谷君の定宿である。この定宿になったのもまた不幸な事情があつたのであると聞いた。

八日は一日中水谷君宅で炉を囲んで話し、一日中暮した。

九日は三人連れ立って熊本に帰り、鬼塚友規（早稲田時代の友人）と四人で写真を撮った。高木正雄君を訪問しようとしたが出来なかつた。

十日朝十時熊本を出発して帰路に就いた。立野に宿泊した。立野は阿蘇山の麓にある小さな駅場である。熊本から八里ある。

十一日は阿蘇山に登り夜は坂梨に泊った。

十二日は坂梨を馬車で出発して竹田まで行き午後二時に着いた。竹田からまた徒歩で夜になって市場（三重）に着いた。

十三日に佐伯に帰った。市場と佐伯との行程は十一里ばかり。徒歩で帰った。

この間、見聞したことや感じたことが少なくない。追いつき書くことにする。

と、ある。熊本から佐伯まで、途中阿蘇山に登り三日四日で九州を横断したのである。しかもその間坂梨から竹田まで馬車に乗っただけで、あとは徒歩で歩いたのである。独歩兄弟の健脚ぶりには敬服の外はない。

この阿蘇登山のことは、小説「忘れえぬ人々」の中に詳しく記してある。抜粋しよう。

この小説の中程から少し後の方に

その次は今から五年ばかり以前、正月元旦を父母の膝下で祝つて直ぐ九州旅行に出かけて、熊本から大分へと九州を横断した時のことであつた。

と、書き出してこの旅行記を書いてある。

僕は朝早く弟と共に草鞋脚絆で元氣よく熊本を出発した。其日は未だ日が高い中に立野といふ宿場まで歩いて其処に一泊した。次ぎの日の未だ登らないうちに立野を立て兼ての願で、阿蘇山の白煙を目がけて箱を踏み栈橋を渡り、路を間違へたりして漸く日中時分に絶頂近くまで登り、噴火口に達したのは一時過ぎでもあつただろうか。熊本地方は温暖であるがうへに、

風のない好く晴れた日だから、冬ながら六千尺の高山も左まで寒く感じない。高嶽の絶頂は噴火口から吐き出す水蒸気が凝って白くなって居たが其外に満山はとんど雪を見ないで、たゞ枯草白く風にそよぎ、焼土の或は赤き或は黒きが旧噴火口の名残を彼処此処に止めて断崖をなし、その荒涼たる、光景は筆も口も叶はない。

僕等は一度噴火口の縁まで登て、暫時くは凄まじい穴を覗き込んだり四方の大観を窓にしたりしてゐたがさすがに頂は風が寒くて堪らないので、穴から少し下りると阿蘇神社がある。其傍に小さな小屋があつて番茶位は吞ませて呉れる。其処へ逃げ込んで団飯を齧つて、元氣をつけて、又た噴火口まで登つた。

(中略)

いっそのこと山上の小屋に一泊して噴火の夜の光景を見ようかという説も二人の間に出たが、先きが急がれるので愈々山を下ることに決めて官地を指して下りた。下りは登りよりかずっと勾配が緩るやかで、山の尾や谷間の枯草の間を蛇のやうに蜿蜒うねうねつてゐる路を辿つて急ぐと、村に近づくに連れて枯草を着けた馬を幾回か遠こした。あたりを見ると彼処此処の山尾の小路

をのどかな鈴の音夕陽を帯びて人馬幾個となく麓をさして帰りゆくのが数へられる。馬はどれも皆な枯草を着けてゐる。麓は直きそこに見へても容易には村へ出ないので、日は暮れかゝるし僕等は大意に急いで終いには走つて下りた。

村に出た時は最早日が暮れて夕闇ほのぐらい頃であつた。村の夕暮れのにぎはいは格別で、壮年男女は一日の仕事のしまいに忙しく子供は薄暗い垣根の蔭やかまどの火の見える軒先に集つて笑つたり歌つたり泣いたりしてゐる。

(中略)

一村離れて林や畑の間を暫らく行くと日はとつぷり暮れて二人の影が明白はつきりと地上に印するやうになつた。振向いて西の空を仰ぐと阿蘇の分脈の一峰の右に新月が此窪地一带の村落を我物頭に澄むで着味がゝつた水のやうな光を放つてゐる。二人は気がついて直ぐ頭の上を仰ぐと、昼間の真白に立ちのぼる噴煙が月の光を受けて碧瑠璃の天空を衝て居るさまが、いかにも凄しく又美しかった。

(中略)

暫くすると朗々な澄むだ声で流して歩く馬子唄が空車の音につれて漸々と近づいて来た。僕は噴煙を眺めたまゝで耳を傾けて、此声の近づくの待つともなしに待ってゐた。

人影が見えたと思ふと「宮地やよいところぢや阿蘇山ふもと」といふ俗謡を長く引いて丁度僕等が立つてゐる橋の少し手前まで流して来た。其俗謡の意と悲壮な声とが甚に僕の情を動かしたらう。二十四五かと思はれる屈強な壮漢が手綱を牽いて僕等の方を見向きもしないで通つてゆくのを僕はちっと睥視めてゐた。夕月の光を背にしてゐたから其の横顔も明毫と知れなかつたが其逞しげなる体軀の黒い輪廓が今も僕の目の底に残つてゐる。

僕は壮漢の後影をちっと見送つて、そして阿蘇の噴煙を見あげた。「忘れえぬ人々」の一人は則ち此の壮漢である。

と、ある。阿蘇山の風景を巧みな筆致で描写してある。馬子唄を流して通りすぎた若者が忘れえぬ人々の中の一入であつた。

独歩はまたこの旅行のことを友人の中桐確太郎と大久保余所五郎とに報らせてある。

大久保に宛てた手紙から抜き書しよう。

去年十二月二十五日佐伯を發し帰省仕り七日間故山に滞在、本年本月三日の夜を以て再び航海をはじめ、門司に上陸し門司より、途中箱崎八幡、博多、太宰府等を見物仕り候。熊本には五日間滞在、其の中二日は市街を去る三里許りの田舎なる杉上村てふ処に在り、則ち水谷真熊兄の家に在り。十日の朝熊本を發し行程三十六里のうち七里を馬車に其他は徒歩にて九州横断十三日の薄暮月光已に冴へ渡りたる頃漸く佐伯に帰り着き申候

二十日間の見聞感慨書き尽す可くも非らず、其の内尤も君に語りて妙なるは阿蘇山の登攀なり。阿蘇山は立野てふ処より登れば噴火口まで三里許り、噴火口より北西に走り下れば二里許り、兎も角随分大なる山也僕等兄弟此山に一日を暮し候。突兀として立てる山と思へば大間違ひ也。山中枯草漠々たる平原起伏小丘こゝかしこに頭をもたげ以て阿蘇の山々を組織せり、甚だ寂莫たる山なり。深山の幽暗なるきび悪ろさよりも

古戦場の荒野の物すぎき也、殊に噴火口の近辺は焼石
 兀突として起り満月の光景実に人をして血の氷るを覚
 へしむるものあり。目下噴火口は一個也。されど旧噴
 火口は阿蘇山中処々に在り、兎も角吾等が生息する此
 の地球は必ず冷却しつゝある也。彼の月球の如くに、
 されど怪む勿れ、天帝無窮の時間よりすれば地球の生
 命も野馬の生命も何ぞ長短を撰ばん。さても不思議千
 萬の宇宙かな。など噴火口の辺に立ち乍ら兄弟共語り
 申候 (以下略)



短歌

霧島山麓・大隅地方研修旅行 (2)

宮崎 千 ズ

(会員・佐伯市中村北町)

内の浦宇宙のことは地球まで幽けしわれに聞ゆるごとし
 内の浦ロケット発射に夢托し美宙橋を振り返へりみる
 群生の蘇鉄恋ほしも赤き実の靡く潮風都井の岬に
 都井岬車にすりよる仔馬あり立髪たたきて別れ惜しみぬ
 海水で芋を洗って食べるといふ幸島に棲む進化せる猿
 日南の海岸沿いにひと群のこばなせんなん清らに咲けり
 花園の名残りとどめし飢肥城ひじょうの秋の気配を楼門に聞く
 根をつけて漸く採りし花蔵わが持ち帰る旅のしるしに

十二月六日

